



## センタは大学を変える？

小林 史典<sup>1</sup>

大学の機能は教育・研究・社会貢献・…とさまざまですが、そのため組織としては学部(学府、研究科)、学科(専攻)が表に出るのが普通です。しかし、たとえば本学の組織図の最後に十把一からげに「センター等」と示されているものも、運営組織と並んで、ときに大きな比重を持ってきます。

私は現在、そんな組織の1つ、マイクロ化総合技術センターの長をしていますが、過去には情報センター<sup>2</sup>との関わりが深く、まず個人レベルで、それが私の方向性にかなり影響を与えた、と思います。そしてさらに、センタという存在が大学そのものも変える可能性がある、という気がしてなりません。

私とセンタとの関係の始まりは30年近く前、前任の長岡技術科学大学での、人事係からの電話でした。「先生の、4月からのセンタ兼任のことですが」に絶句したのは、それまで何も聞いていなかったからです(学科長が私に伝えるのを忘れた、というミスだったのですが)。私の情報センターとの関わりは、こんな青天の霹靂でスタートしました。

スタッフと手仕事 これまで運営委員だった私が「中」に入って、まあうまく動いている、と思っていたセンタの印象は一変しました。職員が消極的で、定型業務が中心になっています。そこで、彼らと話したところ、それでも、決して現状に満足してはおらず、結構いろいろな夢を持っていました。

それなら後は実行ですが、私は手仕事が好きなので、コミュニケーションついでにと、技術職員と一緒にやることにしました。下記の東大のサービスに当っては、課金のためのデータ記録機能をPCで実装し、Turbo Pascalのコードを私が書きました。当時、UPSは手軽に買えなかつたので、ユーザのlogin/logoutの情報を時々刻々でプリンタに書き出すようにした、などを思い出します。

事務方との飲み会 教員にとって事務方は普通、何かを頼む、というスタンスでの関係です。しかしセンタでは、一緒に何かを立ち上げる、という新しい形態の付き合いが必要になります。

当時長岡のセンタには学務系の事務職員が1名おり、その人と前記技術職員を何度も自宅に呼んで、飲みながら話しました。そこからまた新しいアイディアが出、センタ事業が充実していったのですが、やがて、運営委員会で忘年会をやって、委員からもアイディアをもらったら、という話になりました。

委員は教員ですが、委員会としてやれば、センタにいたヒラの係員だけでなく、係、課と広がります。そこから、教員と事務方の壁が少しあは薄くなっています。私が長岡を離任する直前には図書館も加わり、総合情報処理センタの夢が語られるようになってきました。

お金を儲け、生かす さて、センタ職員の夢を実現するには資金が必要ですが、予算に余裕はありません。そこで考えたのが、小さな装置をまず買って新しいサービスを始め、それを新しい課金体制にして従来より利益を上げ、得た収入で次のステップとなる機器を入れる方法です。

この小さな装置がTDM(Time-Division Multiplexer)です。それまで長岡は東大 大型センタの「端局」の1つで、東京との間に専用回線が引かれていました。ただ、その利用がバッチ処理に限定されており、TDMを入れたことで、教員室や研究室のPCから、直に東大が使えるようになりました。

<sup>1</sup>大学院情報工学研究院 システム創成情報工学研究系 教授 fkoba@ces.kyutech.ac.jp

<sup>2</sup>これは、本学の情報科学センターではなく、より広い「大学の情報サービスに関するセンタ」という意味です。

これには、バッヂよりも高い時間課金を設定したのですが、直接東大が使える、と好評で、ある程度収入を上げました。このときの事業意識が、その後の私の人生を少し変えたかもしれません。

種まきは収穫の数年前 上記 TDMを入れ替えたころ、私は、東大センタの石田晴久先生が PR されていた Unix に興味を持ち、TDM に東大 VAX への接続を 2 チャネル用意しました。それで Unix のメリットが実感できた私は、講習会を積極的にやり、Unix ファンは徐々に増えていきました。

そして数年後、システム更新のとき、全学に LAN を張り、主な OS を Unix ライクなものにしました。このとき力になってくれたのが、講習会を聞いて Unix を使い始め、研究室に広めた学生たちです。彼らは、アンケートに積極的に回答し、大型機 OS からの転換の原動力になりました。

このときの教訓は、一朝一夕にものごとは成らない、です。数年後にはこうしよう、という意図を持ち、計画を立てて動くことで、一見不可能に見える目標も達成できるのだ、と実感したのでした。

先端的かつ安定に 1989 年、私は飯塚に移ってきました。出身が制御工学科のため、その昔「制御国立御三家」の 1 つだった九工大には、遠い九州ながら親しみを持っていましたが、長岡で機械にいた私が情報工学部に移る決心をしたのは、情報センタでの経験が大きく影響していると思います。

飯塚でまず学んだのが、学科やセンタに最先端のシステムを導入することです。導入そのものは、上記の長岡の経験がありますが、当時おそらく日本で最初の X 端末を、安定して動かして日々の教育・研究に供する、という仕事は初めてでした。非常にきつく、そしてだからこそ意義深かった、と感じています。

キーは、ある程度の先端性と安定した動作のバランスです。研究は基本的に先端を追い、教員は安定性が要求される仕事をあまり経験しません。しかし、それだけでは「事業としての大学」が完遂するはずではなく、この側面を、システム導入を通じて知ったことは貴重でした。

またまた手仕事 もう 1 つ、思い出に残るのが SCS (Space Collaboration System) です。これは、その後インターネット上の Polycom 等に置き換わって廃止されましたが、日本中の大学を衛星回線で結び、遠隔で会議や講義ができるようにしたシステムです。

当時の岡田センタ長から SCS 事業運営委員長に指名されたのですが、私の特徴は手仕事だろう、と、委員会の采配を振るうだけにするのは止めました。立上げ前は、そんなことしたのか、とあきれられそうですが、AV 講演室隣の準備室の床下に潜って配線をし、動き出してからは、鹿児島大の非常勤講師を一部 SCS でやり、その経験を機材や使い方に反映させました。

実際にやられた方はご存じですが、遠隔講義というものは、少し慣れればどうということもないのですが、最初はそう簡単ではありません。それも、自分で使ってみれば百聞は一見に… ということです。

さて、ここに回顧録めいたことを書かせていただいたのは、実は私、この 3 月で退職するためです。情報センタに関して、30 ° くらいずつでしょうか、自分の方向性が変り、振り返ると 180 ° 近く方向転換して、学部長、副学長といった管理職を、昔を思えば本当に「想定外」で<sup>3</sup>、経験することになりました。そのとき、センタでの経験がどれだけ役に立ったか、計り知れません。そして、たまに方向を変えていると、人生も我ながら予想外の展開を生む<sup>4</sup>、と実感しています。

そして、その 30 ° の 1 回は確実に情報科学センター（これは一般名詞ではなく九工大の）によるもので、歴代のセンタ長と多くのスタッフの方々に、心からお礼を申し上げます。また、執行部の先生方がこれを目にされたら、1 つお願いがあります：センタで方向が変わるのは大学にも言えるので、センタスタッフをその側面で、ぜひ積極的に評価いただけないでしょうか。

<sup>3</sup>学部長になった、と学生時代の指導教員に報告したとき絶句されたのは、このことを如実に物語っています。

<sup>4</sup>今後のことを言えば、4 月以降、1 年前まで夢でしかなかった、東南アジアでの仕事に結びつくことになりました。